

U D L M

4

vol.345

April 30th
2024

継
往
開
来

新
た
な
研
究
室
へ

中島直人先生が教授に着任されたことを記念し、
中島先生へのインタビューを行い、
先生の学生時代について伺いました。

Urban Design Perspectives
開かれた都市デザインに向かって

2024年4月14日
中島直人

中島直人先生教授着任記念特集

- p.2-4 特集 中島先生インタビュー
- p.5 教授着任記念講演 / パーティー
都市デザインのこれからを展望する
- p.6-8 中島先生の言葉に触れる

△中島直人教授着任記念講演にて

都市計画への目覚め ー学生時代を振り返ってー

中島先生インタビュー

昨年12月、中島直人先生が教授に就任されました。今月には新M1の学生も入学し、新体制の都市デザイン研究室が始動。2024年度第1号の研究室マガジンでは、教授就任を記念して中島直人先生へのインタビューを行い、都市に対して興味を持った原体験や学部時代の演習、卒論・修論のお話など、先生の生い立ちから修士生時代を振り返ります。中島先生の都市への興味はどこから湧いてきたものなのでしょう。

ー中島先生が最初に都市に興味を持ったきっかけは何でしょうか？

都市への興味の最初のきっかけは 小学校の記念誌と区分地図

都市への関心に繋がった最初の原体験は小学校一年生の時に手にした桃井第四小学校の創立50周年の記念誌です。昔のまちなちの写真が載っていて、その場所が今はすっかり変わっているということがすごく面白いと思ったことが記憶に残っています。また、同時期に愛読書というか好きだったものが東京都の区分地図でした。昔は車とかに積んであったよね。小学校1〜2年生のときに地図を見て面白いと思って、自分で地図を描いていました。架空の都市の地図やその都市の路線図とか色々なものを遊びで描いていました。まちなちの風景の変化に関心があり、地図遊びもやっていたので、都市やまちなちが初めから好きだったわけですね。

ー中島先生の描かれた架空の地図をぜひ見てみたかったです。中学校に上がられてからはどんな学生時代だったのですか？

中高一貫校で部活は完全に生徒の自治で、私は硬式テニス同好会に入っていて、その経験が今の私の考え方をかなり形成していると思います。うちの中高は昔からあるテニス部とテニス部から分かれてきたテニス同好会の2つがあって、テニス部は専用のコートを持っているんだけど、ある種典型的な運動会でして、実力至上主義で高校生が下級生の練習も全部トップダウンで決めるし、下級生の打つ時間が少ない部活でした。対して、同好会はそういうのを嫌って、大先輩たちがテニス部を退部してつくった経緯がありました。同好会は軟式テニス部とコートシェアしていたのでテニス部ほどコートが自由に使えない。でも、なぜテニス部とテニス同好会の2つがあるのか、テニス同好会のアイデンティティは何なのかを考えると答えられない。それがよかった。

ー1つの学校に2つのテニス部とは珍しいですね。同好会での経験が今の考え方に繋がっているとはどういう意味なのでしょう？

我々の部活はテニスを強くなりたい気持ちはもちろんあり、実際テニス部と実力は拮抗していたのだけど、テニスの強さとは違うものを中心の価値として置いている部活だったんです。ただ単にテニスの強さではなくて、それぞれに特徴のある人たちの個性を重んじ、もっと全人格的な関わり方で、部活をやるとというのが我々の同好会のアイデンティティだと意識してやっていたわけです。それはすごく面白い経験でまちづくりの考え方も関わります。メインストリームはテニス部ではあるけど、そうではない位置というものすごくいいなと思いました。中高ではほとんど部活しかやってないですね。今でもOB会に行ってます。ちなみに私が中1の時の高3の部長は実は都市デザイン研究室の先輩でもあるんですよ。

ー中高時代は文理選択や進路を考える時期でもあると思いますが、当時から都市計画の道に進もうと考えていたのですか？

進路選択でまず自分が何が好きかを考えました。高校でもとにかく社会科、特に地理と歴史が好きでした。だけど、そこでなぜ文系に行かなかったかは、兄の影響もあると思います。

進路を考えるときに5歳上の兄がちょうど就職活動をしている時期で、兄は東大で西洋史を専攻していたけれども研究者になるわけではなかったから、文系に行っても勉強したことを職業に生かすのはものすごく難しいと思ったんだよね。文系以外に地理や歴史を生かせるものが他にないかなと探したときに、小学生の頃の関心思い出して、建築とか都市計画があるんじゃないかと考えました。もう1つは絵も好きだったんです。絵を描いたり、物を作るのも好きだったので、全部合わさったもので建築や都市計画があるんだと気づいたのもそのころです。

都市工学科の存在を知って 絶対これが自分の行くところだと思った

それから理系を選んだ後に、越沢明先生の新書「東京の都市計画」の著者紹介で都市工学科の存在を知り、絶対にこれが自分の行くところだと思いました。しかも本の中に自分の故郷である善福寺の区画整理の話が出てきたので、これはもう運命だと。東大は1年生ではまだ学科は決まっていなくても、私は初めから都市工学が学びたかったから、それ以外はまったく考えなかったですね。他のことに興味がなかったから（笑）



▲戦前の善福寺風致地区の景観：東京府風致協会聯合会「東京府の風致地区」より

ー大学に進学してからはどんなことに力を入れて取り組まれましたか？

大学1年生当初は、運動会だったから正直勉強はそんなにしないんです（笑）1年生のときは駒場で一応都市工学科のオムニバスの授業を取っていたけれど、計画系の授業はほぼなく、あまりよくわからない時期でした。部活動はホッケーをしていて、週5回練習があるし、生活のメインになっていきました。ちなみにこの部活にも一つ上の学年に都市工学科に行く先輩がいて、その人から話は聞いてはいましたね。そして2年生の秋から、都市工学科に進みました。実はホッケーも大学2年生の終わりで辞めるんだよね。

ー週5回の練習はなかなかハードですね。都市工学科の演習もかなり大変だと思うのですが、都市工学科に進んだこととホッケー部を辞めたことは関係しているのですか？

大学生活に自分の中では悩みがあって、ちょうど都市工学科に進むタイミングは一緒でした。1年生のときはテニスとは違うチームスポーツをとて新鮮で、ホッケーしかやっていなかったんですけど、全部の生活が運動会に支配される、その「健全さ」にすごく悩み出しました。

ホッケー部を辞めた直接の理由はロックです。音楽は兄の影響もあって昔からロックが好きで、小さなときから色々な音楽を聞いていたので早熟だったと思います。高校時代は音楽を聞いているだけじゃなくて、文化祭バンドをやったり、雑誌を読んだり。ロックの評論が大好きでした。ところが、大学に入ってから、ホッケーを中心とした世界が自分の理想としているようなロックな感じではなかったんだよね。それが20歳の頃で、最終的にはやっぱり部活だけをやるのが嫌になってやめて、ただロックと関わりたいなと思ってはいたけど、自分で音楽をやるとはなかったから、あんまりうまくはいかなかったですね。もちろん、リスナーとしてCDを買い漁り、ライブやクラブに行ったりはしていたんですけども、それ以上のことはなくて。

自分の中で分裂していたものが 都市計画を通じて、一体化していく感覚

ちょうどその頃が都市工学を学び始めた時期だったので、都市計画が面白くて、全力をかけようと思いました。演習とかすごく楽しかったんですね。設計を面白く感じたり、先生に都合よく評価されたところだけ覚えていたのか、自分は向いているのかなと自分に思いこませながらやっていました。部活をやめた後は時間もあって、授業だけでなく、色々な都市を見に行ったりもしました。音楽を聞くことも都市の体験としてうまく生かせることがわかったし、それまで自分の中で分裂していたものが都市計画を通じて、ようやく一体化する感覚でした。ロックみたいなことを都市計画でできるんじゃないかなと思ったということもあるかもしれないですね。

ー都市計画とロックというと、かなりかけ離れているもののように感じるのですが、ロックと都市計画の親和性は何ですか？

ここでいう「ロック」は音楽の種類の話ではなくて、思想、そして連帯感。つまり音楽を通じて人と人がコミュニケーションをとって、繋がっている感覚をさせていて、音楽も都市計画、まちづくりと似ていると思っています。例えばライブだと、来ている人たちはみんな他人でも音楽を聞いて、同じ思いではないかもしれないけれど共感して、同じように盛り上がるでしょ。それが何か一緒に繋がっている感じがして好きですね。ロックにすぎるとなると人は孤独な人が多いわけだね。だからそういう場に行く。都市計画でやっている居場所やコミュニティをつくることに全部繋がっていききました。

ー学部2年生の秋に都市工学科に入ってから演習での思い出はありますか？

よく覚えているのが、一番最初の、現在の「心地よい都市空間」の前身の課題です。当時は本郷とかいくつかのまちを歩いて、まちのレポートをするというものでした。その課題で私は写真ではなくてスケッチを描いたんだよね。今、演習で言っているスケッチと写真の違いについて、最初から言われていたわけではなかったのですが、写真では自分がまちから得た想いは伝わらないと思って、普通は写真を載せることを水彩のスケッチを描いたら褒められたことを覚えています。次の代官山の設計のジュリーでは、私の立面図を見た西村先生にいいねと言われたことが記憶に残っています。C棟の建て替えの課題で、立面図でC棟の横にあるD棟との関係を表現した。要するに1棟だけでなく、隣の棟とうまく調和したデザインだというだけの話です。



▲代官山ヒルサイドテラス：現在も学部生の演習課題の対象地となっている
<https://hillsideterrace.com/about/story/>

褒められたことを一つひとつ自分の糧に

20歳の頃は自分が何が得意かや得意かはわからないから、人が言ってくれた評価や褒められたことをうまく自分で掴んで、組み立てて、自分はこういうことが向いているのかなと自分の糧にしていくなかで、当時から言われたことはよく覚えていて、1個1個を自分としては都合よく解して、演習に取り組んでいました。あと、学部生の時は過去の都市デザインの事例を集めて、都市デザインの歴史を展望する都市デザイン論講があって、それが都市デザイン研究室の先輩と最初にやったものですね。

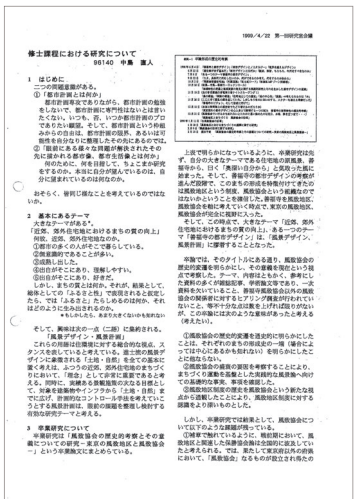
ー学生の時に先生方からもらった言葉は中島先生にとっても印象深いものだったんですね。演習を経て、都市デザイン研究室に入ることを決めた理由をぜひ知りたいです。

設計をやりたいなと思ったことと演習で当時の都市デザイン研究室の助手や先生たちとの付き合いが楽しかったことが大きいです。そして、都市デザイン概論という西村先生の授業が、とにかく面白かったんです。実はその授業の中で郊外住宅地のデザインという回があって、今でもそのレジュメを持っているんだけど、そこにまたしても私の出身地の善福寺が出てきたことをよく覚えています。デザインの歴史の授業みたいな話だったかな。

ー卒業研究では「風致協会の歴史の変遷とその意義についての考察 東京の風致地区と風致協会」というテーマで研究されていますが、テーマはどう決めたのですか？

4月の最初の卒論会議では自分の地元の善福寺について、何か設計をやりたいと思っていて、その時から11月ぐらいまで卒業設計をやるとなりました。でも、急速、設計ではなく、論文を書くことになりました。善福寺のまちなちの歴史や現状を調べ、何を提案したいかを考える中で、元農家の屋敷や大きな邸宅の庭に残る、建物よりも大きい樹木に歴史を感じて、それをヒントに景観デザインと繋げてやりたいんだみたいなことを発表したのが11月ころ。でも、これを発表したときに、ちょうど西村先生が欠席で、北沢先生が私のレジュメを見て、論文の方がいいんじゃないかと。まちを調べる中で、風致協会という存在にも既に出会っていて、そうか、じゃあ論文を書こうと思って、論文に変わりました。そこからまたいろいろ調べて、迷いながらも最終的には風致協会の研究をすることに落ち着きました。

▶現在も研究室に保管されている
第一回研究会議（修士）のレジュメ



一修士論文では「都市美運動」という、卒業論文とは一見異なるテーマを扱われていますが、どのような背景があるのでしょうか？

ちょうど修士1年になった頃、都市計画のテーマとして、「風景」や「景観」ということが話題になっていました。また卒論で「風致協会」を扱っていたので、漠然と「風景デザイン・風景計画」がテーマになるのかな、と考えていました。そして、「都市美」というテーマに出会ったのは、研究室で調査を通じて取り組んでいた丸の内の美観地区ガイドプランでした。ちょうどその頃、バブル崩壊から10年くらい経って、それまでしばらく停滞していた丸の内の再開発が丸ビルを皮切りに始まった頃で、31mラインが崩れ始めていました。そこで、都市デザイン研究室としてこの問題に先輩たちが取り組んでいました。その調査をとりまとめた、当時助手だった鈴木伸治先生が丸の内の景観をテーマに博士論文を書かれていて、そのお手伝いとして、資料調査などをしていく中で「都市美運動」というものに出会い、研究対象とすることにしました。

▲千代田区景観まちづくり計画(R2)に繋がる「千代田区美観地区ガイドプラン」

設計ではなく、「論文を書く」ことを通じて自らを発信する

その後は自分で決めたテーマに夢中になり、比較的順調に論文を書き進めました。博士論文も「都市美運動」をテーマとしましたが、博士論文の内容の8割は修士の間に調査していました(笑)また、卒論を通して、ものを書くということが面白いと思うようになりました。自分の考えを表現する手段として、設計やデザインも楽しかったのですが、私には論文を書くという手段もあると感じました。正直、当時は論文を通して何か社会の役に立つというよりも、**社会に対して自分自身の存在とか立ち位置を発信していくために、論文という手段が興味深い**と感じていて、修士2年には卒業論文を都市計画学会に投稿しました。

一現在都市デザイン研究室の主要な取り組みとしてプロジェクト活動(以下、PJ)がありますが、中島先生が修士学生だった頃はどうかだったのですか？

学部時代には研究室としてのPJには参加していなかったのですが、西村先生に岩手県から依頼があって、岩手各都市でのPJが始まりました。1年もしくは2年毎に都市を変えて、順々に各都市のまちづくりを手伝っていくような形でした。2,3年目に釜石市の中心市街地再生プランを考えることになり、私は修士1年の時に釜石のPJの2年目に関わることになりました。当時は今のように地域と学生とが関わるというよりは、地域と関わるのは先生が主で、学生は調査やプラン作成などの作業を淡々とこなしていく感じだったような気がします。ただ、学生の間でもPJのありかたについては議論がなされていて、当時M1で、世田谷まちづくりを主導された卯月盛夫先生の教えを受けていた平野さんはそういった住民主導型・伴走型のまちづくりに精通していて、ある時釜石で、先生も交えたミーティングで、「こんなのはワークショップではない!」と言い放ったことがあって、その時、北沢先生はさすがで、「そう、学生からそういう意見が出てくるのを待っていたんだ」と切り返されていましたね。

一1年目の活動を受けて、2年目の活動の仕方には何か影響がありましたか？

修士2年で取り組んだ鞆の浦は、学生が主体的に進めていくPJとしての先駆けになるものだと思います。鞆の浦の港湾を埋め立てて橋を作るという計画が立ち上がった頃、後にNPOを立ち上げられた松居さんが西村先生を訪ねてきて、港湾を守るためにどうすればいいか…という相談をしていました。その後松居さんから**鞆の浦に関する講義をしてもらって、学生間で実際に見に行こうという話になり、自費で夜行バスに乗って現地視察に行きました。**鞆の浦が他のPJと大きく違ったのは、町内会の方々は橋の建設の計画にほぼ賛成している中で、松居さんをはじめとする反対派は**かなり少数だったこと**です。松居さんたちの活動に対する反発もかなり大きくて、**地域の方にヒアリングに行くと怒られることもありました。**ただ、私たちとしては、初めから反対派として鞆の浦に関わっていたわけではなく、外部の者として中立な視点を持ちながらまちの資源や魅力を解明して、それをまちの方々に分かってもらえるように、**という冷静な姿勢を持って取り組んでいました。**夏にたくさん調査をして、一年目の集大成として、『鞆雑誌』という報告書をまとめて、空き家を使った展覧会を行いました。当時、鞆の浦で最も歴史的な境界はほとんどが空き家になっていたのですが、そのうちの1つでお店を開きたいという地元の方がいて、その人と一緒に空き家の掃除から始めて展覧会の開催にこぎつけました。その後、その空き家はお店に生まれ変わり、その後活発化する空き家活用のパイロットプロジェクトになりました。

▲1年間の活動の集大成、『鞆雑誌』

一それから20年ほど経ち、現在は大学教授として、研究者でありかつ教育者でもある立場ですが、それぞれの心構えはありますか？

なるべく小さいものを大事にする

研究者としては、自分自身の研究の他に、行政や市町村、住民と関わりながらまちづくりに携わることが多々ありますが、その時はなるべく小さいもの、生活に近いものを大事にすることを心がけています。これは大谷先生や西村先生の影響も大きいと思いますが、**国の大きな方針づくりよりも、個性をもったまちに深く入り込んで、現場を大事にすることが重要だ**と考えています。現在の研究室のPJも国の方針とかに影響を及ぼすことを目的としたものはないと思いますが、たとえ小さくてもそのまちに効果があることに取り組みたいと考えています。「足下を掘れ、そこに泉が湧く」ですね。また、メジャーなものよりも、それとは異なるオルタナティブを追求することが大事だと思っています。研究の意義があることは大前提ですが、**自分が大切だと思うことを信じてユニークさを追求することが大事だ**と思っていますし、そこに一人ひとりの価値があると思っています。

身近な生活体験から生まれる『問い』を大事にする

これが教育者としての姿勢にも繋がるのですが、学生個人のバックグラウンドを活かした研究をしてほしいと考えています。理系の研究の中には、ある程度研究の課題が決まっています、決められた方法に従って進める研究もありますが、建築や都市計画は生活と密着しているもので、**学術を究めて課題を設定するというよりは身近な生活体験の中で、学生ならではの若い感性を活かしてテーマを見つけ出してほしい**と考えています。もちろんそれを研究に仕立て上げていくためのサポートはしますが、一番大事なものはテーマは与えるのではなく、自分の中から湧き出てくるものだと思うので、様々な都市に足を運んで、自分ならではの都市に対する問題意識を生み出してほしいですね。

記録：小林夏月・水野謙吾

中島直人教授着任記念講演/パーティー

都市デザインのこれからを展望する

4月14日に HASEKO KUMA HALL にて、中島直人教授着任記念講演/パーティーが行われました。「開かれた都市デザインに向かって」中島先生の特別講演とパーティーの様子をお伝えします。



研究室OB・OGなど100名以上が集まりました



最近のPJ活動について展示



特別講演後

清聴ありがとうございます



研究室の歴代の先生方から中島先生へ



パーティーの様子



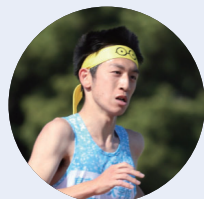
中島先生の言葉に触れる

BOOL OF THE MONTH拡大版として、マガジン編集部メンバーそれぞれが中島先生の著書・論文で気になっていた本や興味のある研究を読みました。

01 図説 都市空間の構想力

BOOK

東京大学都市デザイン研究室編・学芸出版社・2015



修士1年
東條 秀祐

選んだ理由

都市デザイン研究室の歴代の先生方が
オムニバスで書かれており、
この研究室における都市の見方を知れる
一冊だと思ったから

「自分自身が都市の作品の一つである」(あとがきより)

都市工に来て半年、都市計画を学ぶ行為は、我々の生活の場である都市の解像度を上げる営みであると感じる。この本は坂、山景、大通り、街路パターン、ファサード、広場など、普段何気なく見流す要素に気づきを与え、まさに都市空間の解像度を上げるような一冊だった。

東京に来て半年、東京の街の面白い点は地形の変化に富むところだと感じる。複雑な地形こそが、多様な道路網、鉄道網、建築形態を生み、そして多彩な都民の生活に結びついている。

あとがきに「自分自身が都市の作品の一つである」とあるが、今日の私の行動選択も、「東京」という作品の一部なんだらう。



図説 都市空間の構想力
東京大学都市デザイン研究室 編
中島直人 監修
学芸出版社
2015年



デザインの出发点
中島直人 著
学芸出版社
2015年

△数多くの図版とともに、都市空間に内在する構想力を読み解く際の視点について言及した一冊。

03 アーバニスト 魅力ある都市の創生者たち

BOOK

中島直人＋一般社団法人アーバニスト・ちくま新書・2021

「都市を計画するというのは、都市の現在や未来に信頼を寄せるポジティブな態度である」(p.279より)



アーバニスト
中島直人 著
一般社団法人アーバニスト 監修
ちくま新書
1614

アーバニストとは何なのか。本書では「都市計画の専門家」と「都市での生活を楽しむ人」とが重ねあわせられた領域で活動する人をアーバニストと定義し、その歴史と現在を辿り、「都市が人を生み、人が都市を生む」循環が提示されている。

都市工学を専攻して1年が経つが、いまだに「都市計画」という言葉に対して堅いイメージを持っている。なじみのない人にとっては尚更だろう。しかし、都市の将来像を構想しているとき、すでに誰もが生活者であり計画者でもあるアーバニストとなる可能性を秘めているのだろう。

△アーバニストの歴史的な変遷を解説するとともに、その現代像を描いた一冊。



修士2年
小林 夏月

選んだ理由

「都市が人を生み、人が都市を生む。」
という本の帯に惹かれて

02 高島平ヘリテージ 高島平をかたちづけてきた50の都市空間

BOOK

UDCTak 高島平ヘリテージプロジェクト編・地域貢献会社こ・2020



△今後の継承が期待される地域資源を「ヘリテージ」と定義し、高島平の50の都市空間を取り上げた一冊。

“自分なりの「ヘリテージ」があるまちをもっと増やしていきたい”

これまでの高島平の蓄積から、今後もまちづくりの鍵として継承されることが期待される「高島平ヘリテージ」。まさに、研究室PJの鉄則である、その土地を歴史的な視点から読み解き、地域の方々と共有しながらまちのこれからを考えていく、という姿勢が示されていた。

あとがきにもあったが、「ヘリテージ」になるような都市の中に隠れたユニークな空間というのは、どのまちにも人知れず佇んでいるものだ。自分なりの「ヘリテージ」があるまちをもっと増やしていきたい。



修士2年
元吉 千遥

選んだ理由

これまでの研究室PJの在り方を
学んでみたいと思ったため



修士2年
山田 真帆

選んだ理由

自分の研究につながるものを
読みたかった

04 ニューヨークのパブリックスペース・ムーブメント 公共空間からの都市改革

BOOK

中島直人編著・学芸出版社・2024

「公共空間の『公共』とはいったい誰のことなのか、が問われている」(p.6はじめにより)

研究で「公共空間の私化」を扱おうとしているため、本書を手に入った。

NYの公共空間整備をリードした2人へのインタビューが印象的だ。歩道の私有化に過ぎないのではないかとこのジレンマに直面しているクレア・ワイズ。また、アンディ・ウィリー＝シュワルツは、魅力的な公共空間形成にコミュニティの主体的な行動が重要だとしつつ、行政とコミュニティの役割分担のバランスに苦心したという。

私の研究の対象とは、地域も担い手もスケールも異なるが、場所に存在し、場所を使うということへの考え方については通ずるところがあるだろう。

研究のヒントと勇気もらった一冊である。



公共空間から人と都市の関係を再構築
世界一エキサイティングな都市改革。
公開・米空・街路・公園空間の新たな再生。
運動する制度・組織、30年の挑戦に見る、都市の本質と未来。
学芸出版社

△様々な視点から、人と都市の関係を再構築する公共空間の在り方を取り上げた一冊。

05 東京都区部の戦災復興区画整理地区の景観特性の把握 —一般市街地での住環境向上施策としての景観計画立案に向けて—

PAPER

中島直人・野原卓・中島伸 (2009)『住宅総合研究財団研究論文集』35号 pp.71-82 住宅総合研究財団



修士2年
水野 謙吾

選んだ理由

画一的になりやすい区画整理において、それぞれが特徴的な街並みを形成しているのは、建築物の“化粧”以外に要因があるのか気になったので！

“先生ならではの丁寧な景観把握のされ方なのではないか”

東京の戦災復興区画整理事業全36地区における景観特性を、「地」と「図」という景観把握の基礎的な手法を用いながら、「街路網や街路配列」「緑」「隅切り部の建築」の3点に結論付けられていました。

東京の市街地の特徴から、容易に変化しない豊かな「地」を基盤とし、一般的に「地」としてのみ認識される緑を成熟した「図」としても捉えたり、「図」としてのみ認識される建築物を、一般的な建築物集合体としては「地」と密接な関係を持つものとして捉えられている点が、卒業論文時代から「風景」や「景観」をテーマとして研究されている中島先生ならではの丁寧な景観把握のされ方なのではないかと感じました。

06 アーバニズム・プレイス展 2018 の展示デザインと来場者評価傾向

PAPER

中島直人・永野真義・杉崎和久・中野卓・園田聡・高野哲矢・長谷川隆三・湯澤晶子 (2020)『日本建築学会技術報告集』26巻63号 pp.713-718 日本建築学会

“先生の志向する都市デザインの民主化に対し非常に示唆的なものを感じた”



△アーバニズム・プレイス展 2018
フライヤー

本報告は実際に開催された公向け展覧会「アーバニズム・プレイス展 2018」において、展覧のプログラムやプロセス自体を公共空間におけるアーバニズムに内包する試みとして、実験的な手法論を詳細に記述したものであり、広場の日常利用を再現すべく詳細な工夫が見て取れる。

特徴的な点として来訪者の属性を「専門家/一般市民」とに分け、その観点から展示の効用を評価しており、「展示 or トークショー」等の都市計画を伝える媒体も含め考察していた所に、中島先生の志向する都市デザインの民主化に対し非常に示唆的なものを感じた。



修士2年
音山 尚大

選んだ理由

55 HIROBA が好きな事例だったのと
PJで展示手法を考えることが多かったため
勉強になりました！

挨拶

本寄稿にあたり、二十代目という節目を担わせていただくことを初めて自覚し、マガジンの歴史と責任の重さを実感しています。昨年度、自らがマガジン編集部として過ごす中、教員やOBOGの方とお話する中で、「都市デザイン研究室マガジン」が話題に上がる事が多いことに気づきました。個人の研究、プロジェクトと並んで、各々の自己表現の場として都市デザイン研究室を構成する重要な要素のひとつであり続けてきたということでしょう。

「外に向けてどう発信するか」を考えたつても、当たり前ながらその源は我々都市デザイン研究室に所属する者自身の中にあります。そしてまた、考えるという行為は過程にとどまらず、必ず形として残してきたことで、「確実にあるもの」として（時には文字通り、冊子を）手に取って共有することができるのだと思います。だからこそ、時を超えて、共通言語として語ることができるのではないのでしょうか。

1年後、2025年4月に、この都市デザイン研究室マガジンは20周年を迎えます。かつてつないできたこの「共通言語」に、私たちの色も加えながら未来へ繋いでいけるよう、編集部一同、精一杯務めてまいります。

第二十代編集長

山田 真帆

COLUMN

4月号担当
M2 小林夏月



中島先生教授着任の記念号を担当することができ、大変嬉しく思います。インタビューや講演、書籍など様々な形で改めて中島先生の言葉に触れ、先生の都市への興味の根源を紐解くひと月になりました。新体制となった都市デザイン研究室での学生最後の一年を自分らしく、初心を忘れずに邁進していきたいです。